

アカシア夜話

アカシアンナイト
第10話

(勤労奉仕そして被服)



1945年(昭和20年)、全国の中学生や女学生が勤労奉仕に動員される中、広島高師附属中学の生徒たちも例外ではありませんでした。今回は、当時最上級生(4年生)だった38回の中西 巖さん、森 武徳さん、津田和三さん、檜垣孝雄さんにお集まりいただき、1年生だった新井俊一郎さん(41回)と共に、当時のお話を伺いました。

学制変革

甲斐：今日はお集まりいただき、ありがとうございました。最初に一つお聞きしたいのは、旧制中学は確か5年制ですから、新井さんが1年生の時の最上級生は37回になるはずですが、なぜ38回が最上級となるのでしょうか。中西：昭和19年度から4年制になったんです。ただし実施されたのは昭和20年3月卒業の37回生だけでした。新井：だから私が入学した時にもらった生徒手帳では、校歌の「いとせ」が「よとせを」になってました。森：その昭和19年というのは、いろいろな学制変革がありました。科学学級が誕生したのも昭和19年。いろいろなことが起こったね、あの年は。

戦争の時代

森：小学校に入学する年の2月に、2.26事件があってね。2年生の時に盧溝橋事件。それから本格的な戦争時代に入りました最初は私どもの生活に影響はあまりありませんでした。そのうち、2、3年生の頃から、例えば小学校の遠足でもお菓子を持って来ることはできない、弁当は日の丸弁当という強制が始まったりとか。欲しがりません勝つまでは、みたいな形で生活全般が制限されるようになりました。



中西 巖さん

中：私は向洋に住んでいたけれど、連日連夜、出征する兵士を見送りに行きます。日の丸の旗を紙で作ってね。皆が宇品まで歩いて行った。甲：宇品まで来るのですか、小学生も。森：あの頃、大陸に送られる兵隊は、広島に集められたん

です。そしてここで部隊編成をして、装具一式新品を支給して、宇品から船に載せられて大陸に渡って行くんです。津：私は鷹野橋に住んでましたから、その行列が必ずあの電車通りを通るんです、毎日のように。新：町内会や学校から動員がかけられて、日の丸持って集まると。森：小学生や、婦人会や、在郷軍人会などが動員されて小旗を振って、バンザイ、バンザイで。中：僕らは向洋から宇品の港へ行って、あそこの船で出るのを見送って旗を振るのね。森：部隊が4列縦隊で行進していくのですが、女の人が、たいていその部隊の後ろからついて行くんです。乳飲み子を背中に負ってました。一家の支柱になる人が召集で戦地に送られるわけですから、大変なことだったなと思います。



森 武徳さん

日米開戦・附属中学入学

森：附属中学入学の直前の昭和16年(1941年)12月8日が真珠湾攻撃の日で、環境がいろいろと変わりました。臨時教員養成所も、増員されました。理科の先生方が応召で、数が足りないと。私どもが東組で、1学年3クラスになる初めてのクラスでしたが、臨時教員養成所が増員されたから、教育実習に来るクラスが足りないというので増員になったわけです。檜垣：元々は北組と南組だけで、東組はありませんでしたから。津：そうです。急に増員した粗製濫造組なんです、私達は。中：だから学科試験も無かったですな。メンタルテストみたいなのが、ちょっと。森：あとは小学校からの内申書。甲：それで一クラス分、38回から人数が増えているのですね。

勤労動員

甲：勤労動員というのはいつ頃から始まったのでしょうか。森：1年、2年の時から日帰りや泊まり込みもあったけれど、その時々いろいろな所に行きました。陸軍の兵器廠、被服廠、糧秣廠なども。中：ただ1年、2年はやっぱり勉強

もしましたよ。津：水害の復旧に可部や緑井、三入の方によく行きました。中：農家に泊めてもらって。新：作業態度が優秀だといって、附属が褒められたと聞きました。



津田和三さん

中：3年生になると岩国空港、我々はその所でさんざん勤労奉仕をさせられて。森：あそこに零戦がおったんです。掩体(えんたい)壕(ごう)いうので、零戦の周りにモッコで土砂を運んで、馬蹄形の土手を作って囲みんです。壕(ごう)たつて、穴(あな)じゃない訳で。上(うへ)からやられたら、別になんでもないんですが。中：上(うへ)はパーパーです。森：周りに爆弾(ばくだん)が落ちた時に、爆風(ばくふう)を一応(いちおう)受けないというだけのこと。結局(けつごく)、何(なに)の値打ち(ぢうち)もなかった。さんざん、ひどい目に遭(あ)うて。中：時たま、その中に機銃(きじゅう)が据(く)えてあるから、よく見たら木造(もくぞう)で、ニセモノ(にせもの)だったんです。そんな具合(ぐあい)でした。森：大変な重労働(じゅうらうどう)でした。だからお昼休み(ひるやすみ)が1時間40分(いちじょうしよんしよんぷん)もあるんです。25分(にじゅうごぶん)作業(さぎょう)があると15分(じゅうごぶん)休み(やすみ)をくれたり。大人の基準(きんじゅん)でそうなるくらいですから、とても私達(わたし)中学(ちゅうがく)3年生(さんねい)の体力(たいりき)でもてるような労働(らうどう)じゃなかったです。中：苦し(くるしみ)かったから、おおかた1ヵ月(いっかげつ)だったのかな。森：いや1ヵ月(いっかげつ)は無い、半月(はんげつ)ですよ。中：半月(はんげつ)だったかなあ、長く感じたよのお。本当(ほんとう)にもう、逃(に)げて帰(かえ)ったのもおったよ。津：そうそう。逃(に)げて帰(かえ)ったのも、入院(にゅういん)する者(もの)もおるし。大変(たいへん)でした。檜(ひ)：私は行(い)ってないよ、あそこ(あそこ)にね。ちょっと不思議(ふしぎ)なんだよ。病気(びょうき)とかなんとか言うて、うまいこと免(ま)れたんかな。甲：今(いま)から考え(かんが)えたら、バカ(ばか)な作業(さぎょう)ですよ。森：あんなの、ブルト(ぼると)ーザー(ざー)が一つ(ひとつ)ありさえすりゃあ、3日(さんじつ)もありゃあできるのに。むしろを縄(な)でくくったモッコを、天秤棒(てんべんぼう)で、二人(ふたり)でそれを一つ(ひとつ)担(か)いでね。中：水田(みづゐ)のべとべとの土(つち)で、土(つち)が重い訳(わけ)ですよ。森：それでも、アリ(あ)りが土(つち)を運(は)ぶようにね、人海(じんかい)戦術(せんじゆつ)で運(は)んで。15歳(じゅうごさい)の子供(こども)が50kg(ごじゅうきょ)を担(か)いだよね。中：そうそう、自分の体重(たいじゆう)ぐらいいは。

被服廠

甲：被服廠(ひふくじやう)での作業(さぎょう)は4年生(よんねい)になってか

らですね。中：いえ、3年生の6月からです。檜：だいたい2年間、しごかれたわけです。私は小柄で非力だったから、被服をトラックに積み込むのは大変な重労働でした。森：見習い士官が、私らの班に2度ほど監督みたいな形で眺めに来たことがありました。それで我々に能率を上げることを強制するわけです。最初の見習い士官は、私達を1列に並べて番号をかけさせ、それを固有の番号にして、担いで来てトラックに載せる時に番号を言わせました。それを見習い士官が記録するわけ。運んだ回数が少ない者がいない様、競争でやらせるのです。ところが私達はトラックの台数と運ぶ距離によって、1日の仕事量というのは決まる、というのを知ってるのですよ。だから、どんなにテンポを上げてみても能率が上がるということは、全然無いわけです。我々は、もう経験上、それを知ってるものだから、疲れないようにうまく休憩も取ったりして、要領よくする。それを見習い士官は分かって、テンポを上げさせようとするわけです。疲れるだけで、能率には全然関係ないから、抵抗をしたわけです。もう順番を変えるなど。やがて見習い士官は分かって。皆を集めてお説教するのですが、お説教がまた能率を悪くするから、こっちは知らんぷりしてる。返事も何もせん。だもんだから諦めて、まあ廃止になって。2度目に来た見習い士官も同様なことをしましたね。



檜垣孝雄さん

中：そういう反抗精神の塊みたいなものでした。その最たるものが例のストライキをやった大事件だったですね。森：ストライキという言葉も知りませんでした、あの当時は。自然発生的に作業放棄っていう形になった。中：今、考えても、私は信じられないです。軍隊の中で労働放棄をやるなんていうことは。新：ありえません。あの当時の常識から言ったら、軍令違反罪でしょう。中：本当は命懸けですけど、なんか皆の気持ちが、自然にそうってしまったような感じで。身体検査もけしからんと言って誰かが言いましたら、そうだそうだということに

なあって。とうとう休憩室の中に立てこもって、絶対出んとか言うてね。森：それで私が廠長と直談判に行く時には、憲兵隊に捕まるかもしれないと思っていました。それで2つの条件を出して、1つは私が帰ってくるまで、皆ここにおってくれということ。もう1つは、今のように憲兵に引張られて行くかもしれないから、誰か検分役に来てくれと。そしたら檜垣がね、「俺が行くよ」と。それで2人で廠長室に行つて。



新井俊一郎さん

中：日本刀に立ち向かったんだよね、この2人で。森：廠長室というのは1階のロビーから階段で上がるような2階の正面の部屋なんです。階段に足をかけたら、上から怒鳴り声をするもんだから、見上げたんです。副官の大尉が日本刀の抜き身でこうやって振りかざして「お前ら、この時勢をなんと心得とるか！この非国民が」って、こう言うて怒鳴るわけです。檜：その瞬間に、わしは記憶を失ったんです。中：恐怖で記憶を失つとるんです。それぐらい、恐ろしいことだったね。檜：記憶がパーッと抜けてしもうてから。中：しかし廠長も、まあね、分かると言えば分かったんだ。まあとにかく、これは学校対被服廠の話だから、お前達とはとにかく引き返して仕事へ入れというふうには廠長が言うてくれたんです。ところが、これが反骨だから、それでも聞かない。結果を聞くまでは動かんとか言うて、まだ頑張ったんじゃないかな。まあ、ひどいもんだけど。しかし、瀬群(せむれ)敦先生が被服廠との間に入って、話を穏便にしてくれたんで、我々はある意味では助かったんだ。森：事なきを得たからね。中：それでなかったら、全員刑務所行きよ、重倉倉いうやつ。軍隊の件だから、それはもう大変なことになつたらう。

先生たちの判断

新：私達1年生と2年生の事です。建物疎開の作業を附属の先生が断つたため、将校が、ダーンと床を軍刀で突いて、「貴様、非国民め！」と言ったそうです。でも先生は頑として引かず。12、13の子

供が炎天下で建物をぶっ壊して、跡に100mの幅の空き地を作る、こういう事をしていたら、機銃掃射でもされたら、絶対危険極まりない。他の学校の先生方も、ワーツと皆そうだ、そうだとおっしゃる。そういう発言ができた学校です、附属っていうのは。中：まあ、その代わりね、附属だけが助かったっていうので、もう延々と言われたわな。津：ずーっと私は口にチャックをせざるをえなかったですね。地元の小学校の仲間はずれ全部死んでいますから。中：自然に附属はけしからんという話になるんですから。私も、もうずっと口にチャックだったです。新：1年生が賀茂郡原村、2年生が豊田郡戸野村に出ていって。3年生は祇園で、4年生は被服廠で労働奉仕。まさに直接被爆。森：被爆して負傷もしたけれど、レンガの倉庫のお陰です、助かったのは。中：私は特に、附属ということで世間からあれこれ言われた上に、妹が全滅した女学院の1年生だった。だけどうちの妹は、その日に限って体が悪いけえ、向洋の家におつて助かった。新：紙一重ですね。中：でも、うちの妹、一生涯苦しんだわな。けしからんと、同級生のお母さん方が。本当はけしからんのじゃないんじやが、持って行き場がない訳よ。

追想

あれから68年。被爆体験者であり、生き残った我々、高齢被爆者には、被爆の実相を伝えるための時間は残り僅かになっています。私たち38回生は旧陸軍被服支廠にて勤労働員学徒として被爆、負傷するとともに、多数の避難してこられた重症者の看護にもあたりました。その痛ましい有様は今も忘れることはできません。原爆ドーム以外の被爆建物の保存は十分とは言えず、このままでは消滅してしまう恐れもあります。しかしこれらの建物は「物言わぬ証言者」であり、尊い犠牲者の魂の残る墓標でもあります。できるならば「被服廠」や、その他の被爆建物が、次世代への被爆の継承のためにも、今後、保存活用されるようお願いしています。

編集を終えて

先輩たちの話は想像を絶する濃い内容ばかりで、何を選べば良いかと。被爆の惨状そのものは、他に譲ることとし、いくつかのエピソードのみをまとめさせていただきました。編集の非力をお詫びいたします。

文責・編集：甲斐 稔(63回)

編集補：河本良子(63回)